

研究発表

中世後期、古典研究の一側面

——近衛尚通の場合——

The study of classic literature in the later medieval age of Japan: The case of Konoe Hisamichi

鶴崎裕雄*

The aim of this paper is to point out some characteristics of the methods of study in the later medieval age of Japan by throwing light upon those lectures on Japanese classics which are recorded in the diaries written by Masaie (1446-1503) and his eldest son Hisamichi (1472-1505), who were the direct descendant of the Konoes, a family of the highest social rank in Japan.

- 1 . Masaie's diary contains many lectures on Chinese classics.
- 2 . Masaie invited lectures for his eldest son, Hisamichi, and Hisamichi did the same for his eldest son.
- 3 . The lectures on *The Kokinshu* were intended to initiate students into its secret art and knowledge, so-called *Kokindenju*.
- 4 . Hisamichi himself sometimes gave lectures for other people.
- 5 . Many more listeners with more varieties of standings and callings are recorded in Hisamichi's diary than in his father's.

* 鶴崎裕雄 帝塚山学院短期大学助教授

6. Hisamichi's diary shows a greater number of *bushi* as listeners.

7. There was a cultural salon centered around the Konoe family.

It seems to be very significant and useful to make a comparative study between the approach to the classical literature in the aristocratic society of Japan and that of the other countries in the world in the Middle Ages.

一、

まず、なぜ近衛尚通を取りあげたか。それは、

- a 近衛家は摂関家の一つで、日本の貴族社会・貴族文化を代表する家柄である。
- b 尚通の日記「尚通公記」(永正3年(1506)―天文5年(1536))はまだ刊行されておらず、一般には手にして読むことはむずかしい。自筆本21冊が京都の陽明文庫にある。その年次は、永正3・4・5・6・7・8・9・10・13・14・16・17・大永3・6・享禄元・2・3・4・天文元・2・5年の21年分、年次は欠けているが保存状態はまことに良好である。
- c 尚通の父近衛政家の日記「後法興院記」(文正元年(1466)―永正2年(1505) 続史料大成 臨川書店)により尚通の幼年―青年時代がわかる。という理由です。近衛尚通の生涯については発表要旨、またプリント3枚目・4枚目の略年表^(註2)を御覧下さい。

二、

「後法興院記」「尚通公記」記載の、近衛家における講師を迎えての古典研究の講義は、以下に述べる①―⑮です。一応、3期に分けてみました。

第1期「後法興院記」尚通元服以前

- ① **三体詩** 文正元年(1466)2月3日—応仁元年(1467)5月8日、講師文紀曇郁(建仁寺213世住持)20回。実相院門跡増運(政家兄)も一緒に受講。この講義については政家の父近衛房嗣の日記「後知足院記」(陽明文庫)文正元年2月27日・同年閏2月3日条にも見える。ところが応仁元年1月、応仁乱勃発。7月6日以降、戦火を避けて政家たちは宇治に移住。日記は文明元年—9年分を欠く(この間、文明4年尚通誕生)。
- ② **孟子** 文明12年(1480)5月23日—同年7月3日、於随心院門跡、講師一条兼良、6回。政家は毎回随心院まで出かけた。受講者に鷹司政平の名も見える。
- ③ **蘇東坡** 文明13年7月26日—同14年3月9日、講師竺関瑞要(南禅寺249世住持)15回。受講者、海住山高清・勸修寺教秀・冷泉為広・随心院門跡。

第2期「後法興院記」尚通元服以後

文明14年2月19日、尚通11歳で元服、この頃より受講者に加わるか。但し明記なし。

- ④ **古文真宝** 文明17年(1485)10月10日—長享元年(1487)6月19日、講師彦龍周興(相国寺蔵主 34歳^(註3)で没、28回。受講者、海住山高清・勸修寺教秀・同経茂・冷泉為広・姉小路基綱・松木宗綱・武者小路縁光・瞳蔵主・東坊城和長。
- ⑤ **論語** 長享2年10月10日、於金龍寺。
- ⑥ **論語** 延徳2年(1490)閏8月14日—同年12月11日、講師聖寿寺一勤^(註4)、22回。受講者、実相院増運・冷泉為広・同為和・武者小路縁光・一条冬良・飛鳥井雅親・同雅俊・園基富・西洞院時顕。
- ⑦ **大学** 延徳3年6月15日—7月4日、講師一勤、4回。受講者、冷泉為広・園基富・万松・甘露寺元長・隋蔵主・寅蔵主・大勝院・賀茂在重・安楽坊。

- ⑧ **孝経** 明応4年(1495)11月2日一同月28日、於鷹司邸、講師高辻章長(27歳 文章博士)5回。受講に出かけたのは政家でなく尚通。
- ⑨ **古今集** 明応6年11月19日一同7年2月5日、講師宗祇、31回。この講義の後、古今伝授が行なわれた。^(註5)「後法興院記」明応6年11月19日条「從今日有古今講尺、宗祇談之、余并前関白兩人外不聴之、肖柏在此座、凡講尺様博覧之躰也、次有三献事(略)此講義前関白所望分也、余以次令丁聞許也」、同7年2月5日条「有古今講尺、至今日結願也、宗祇進伝受之一紙、又從前関白給一紙、同益・香合、余又遣三合二荷」、同月24日条「宗祇来、古今口伝有伝授事」、同月27日条「宗祇来、有古今伝授事」などの記事は、他の講義とは違って、古今伝授という特異なものであることを示している。
- ⑩ **小倉百人一首** 明応7年閏10年14日一同月16日、講師宗祇、3回。
- ⑪ **伊勢物語** 明応7年11月10日一同月16日、講師宗祇、7回。
- ☆ **源氏物語注花鳥餘情** これは講義ではないが、明応8年4月20日、一条家より拝見を許され、伝授同様の誓紙を送った。^(註6)
- ⑫ **毛詩** 文亀2年(1502)11月9日一永正元年(1504)6月9日、講師高辻章長、30回。受講者、飛鳥井雅俊・冷泉為和・理覚院・飯川国資(幕府奉行人)。

第3期「尚通公記」

政家没(永正2年6月19日)後、近衛家の日記は「尚通公記」に継承される。

- ⑬ **源氏物語** 永正7年9月16日一同年11月12日、講師肖柏、^(註7)34回。受講者、武者小路縁光・飛鳥井雅俊・同雅綱・理覚院・勸修寺政顕・万里小路秀房・細川伊豆入道(政誠か)・同弥九義・同三郎・伊勢下総守(幕府執事一族)・丸雅連(石見国出身の武士か)・上野遠江守・仁木式部小輔入道・杉原孝盛(賢盛(宗伊)息)・泉州将監・宮・沢・奈良修理・大田蔵人・富田入道・井上又五郎・進藤信濃入道・千秋将監・西郡貞弘・吉阿弥・竹田

法眼・吉祥坊・玄清（以下連歌師）・宗屯・宗碩・石文。受講者数が多く、身分や職業が多彩である。この講義について、三条西実隆も「実隆公記」同年11月15日条に「陽明源氏講尺今日終巧至権卷云々」と記している。

⑭ 源氏物語 永正17年（1520）8月12日—大永3年（1523）4月8日、講師宗碩、52回（但し「尚通公記」は大永元年・2年を欠くので、多分4年間にわたって講義は続けられたと思うが、講義回数は、永正17年36回・大永3年16回を合せたにすぎない）。受講者、徳大寺実淳・同公胤・飛鳥井雅綱・日野内光・細川尹賢（右馬頭）・同高基（民部大輔）・一牛・岩栖。ここで「尚通公記」永正17年8月12日条「從今日源氏物語講尺、宗碩始之、午剋也、為（近衛植家）重相也、民部大輔・一牛聞之、有一盞」とあるのに注意しておきたい。

⑮ 蒙求 大永6年6月19日—同年9月21日、印蔵主（如月寿印か）12回。受講者、菊蔵主・靈珊・種蔵主・秀蔵主・半井明孝・広橋（兼秀か）。

以上①—⑮が、講師を迎えて近衛家で行なわれた、または他所に出かけて受講した古典講義であります。

三、

ところで尚通は、彼自身も講義を行っております。それらは次の①—③です。

① 古今集 永正6年（1509）3月2日—同月11日、3回。受講者、持明院基春。更に同7年5月2日—同月26日、5回。受講者、持明院基春・玄清。「尚通公記」永正7年5月12日条「左衛門督来、古今伝受事度々申候間、内々令掌了」。同月16日多「玄清古今集之事連々懇望之由以左衛門督申間、少々申間之、香盧・杉原十帖進上之、於前給三献」。同月26日条「左衛門督・玄清古今少々令伝受了、給一盞」。いづれも、⑨に見た「後法興院記」の尚通が宗祇より古今伝授を受けた記事と同様、仰々しい記述である。

② 古今集 永正16年3月11日—同年11月12日、22回。受講者、細川尹賢・

同高基。

- ③ 古今集 天文5年(1577)4月17日—同年11月13日、21回。受講者、印政(連歌師^(註8))。

四、

以上より気付くことをa—gの7項目にまとめてみました。

- a 「後法興院記」には漢詩文の講義が多い。これは政家と尚通の個人的な相違か、時代的な流行などの相違か。
- b 政家は息子の尚通のために⑨宗祇の古今集の講義を、尚通は息子の植家のために⑭宗碩の源氏物語の講義を催している。つまり、子弟、特に嫡子への教育が行なわれている。
- c 古今集の講義は、古今伝授を目的とし、受講者を制限するなど特殊である。前掲の⑨の「後法興院記」明応6年11月19日条、①の「尚通公記」永正7年5月16日条。
- d 尚通は講義を行なった。政家には無いことであるが、尚通は古今伝授を行なっているのである。
- e 「後法興院記」(第1期・第2期)と「尚通公記」(第3期)の家族以外の受講者は、次頁の表に見るように、質的(身分、職業)にも量的にも相違がある。特に⑬の永正7年の肖柏の源氏物語の受講者数は31人もいる。
- b 身分や職業を見ると、「後法興院記」では殆んど公卿・廷臣または僧に限られているのに、「尚通公記」では武士の受講者が増えて、連歌師を合せると半数以上を占める。特にその武士は管領細川高国の一族・被官が目立つ。
- g ここに集まる受講者の顔ぶれは、近衛家を中心とする文化・文芸サロンの面々と重なる。歌会・連歌(和漢)会・楊弓、更に八朔や風呂の記事に見える人々、それは近衛家の集団と言えよう。古代の氏族=藤原氏から、中世の家族=近衛氏への移行である。

	公卿・廷臣	僧	(五山僧)	武士	連歌師	その他	計
「後法興院記」または「尚通公記」いずれかに記載	25	14	(7)	21	5	4	69
第1期(「後法興院記」)	4	2	(0)	0	0	0	6
第2期(「後法興院記」)	16	8	(3)	1	1	0	26
第3期(「尚通公記」)	10	6	(4)	20	4	4	44

五、

最後に今後の課題・展望について一言述べておきます。

まず、同時代の日記との比較検討であります。今回の報告では時間の都合もあって割愛いたしましたが、三条西実隆の「実隆公記」をはじめ、中御門宣胤の「宣胤卿記」など文化・文芸記事の多い日記、九条尚経の「後慈眼院記」など撰閲家の他の日記を検討し、近衛家の古典研究との共通点・相違点を見る必要があります。それにより、中世後期の古典研究の特色・傾向が一層明確になることでしょう。

次に、他民族・他文化との比較検討です。これは研究方法の問題でもありましょうが、中国において、朝鮮において、中世の貴族たちはどのような古典研究を行ったでありましょうか。またヨーロッパ諸民族においてはどのようなであったでしょうか。特にイギリスにおいては如何でしょうか。ライシャワとフェアバンク共著“East Asia the Great Tradition”の中に、ユーラシア大陸の両極端に位置する日本とイギリスは、封建時代以降、殆んど同じよ

うな歴史の変遷をなしている、と書かれていたのを思い出します。

比較文学の研究は作品の内容を対象とすることが多いようです。文学の研究は作品そのものを対象とすることが主眼であることはいうまでもありません。しかし互に交流のない時代、他民族・他文化の比較文学研究には限界があります。これを補うものとして、同時代（時間的時代ではなく、社会制度的時代）の文学作品の背景・土壌について検討することは有意義であります。また文学作品を育む古典研究、その“場”について比較検討することも有用な方法であると思います。

本日、国際日本文学研究集会におきまして、報告を行ないましたのも、最後に述べました他民族・他文化における古典研究の“場”の比較検討につきまして、世界各国よりお集まりの皆様方より御意見を賜わり、お教えいただきたいからであります。よろしくお願いいたします。

なお、本報告中の五山僧につきましては、蔭木英雄氏より御教示いただきました。ここでお礼申します。

注

- 1 （発表要旨）室町時代、特に応仁の乱以後、公家や幕府上級武士の間に古典研究が盛んとなった。古今集や伊勢物語・源氏物語、また四書五経・三体詩など中国の古典に至るまで、有名無名取りあわせ、この時代に成立した数多くの註釈書が現存する。一方「実隆公記」をはじめとする公家たちの日記には古典研究や講義の記録がある。

ここに取上げようとする「尚通公記」は近衛尚通の日記で、途中10カ年の欠落はあるが、永正3年（1506）から天文5年（1536）までの記録である。尚通は、文明4年（1472）生まれ。父は「後法興院記」の著者近衛政家。文明14年（1482）11歳で元服、左近衛少将、延徳2年（1490）右大臣、明応2年（1493）22歳で関白・氏長者、同5年左大臣（翌6年左大臣・関白とも辞任）、永正10年（1513）関白左大臣再任、翌11年太政大臣（関白は同11年辞任、太政大臣は同13年辞任）、永正16年准三宮、享禄2年（1532）62歳で出家、この時までに息植家は関白・左大臣を歴任している。天文13年（1544）8月26日薨去。73歳、後法成寺殿と号された。

本報告では「尚通公記」を中心に、近衛尚通の生涯を通して、中世後期の古典

研究の一側面を眺めてみたい。

- 2 枚数の都合により省略。
- 3 蔭木英雄「五山詩史の研究」笠間書院 P 425
- 4 和島芳男「中世の儒学」吉川弘文館 P 181
- 5 伊地知鐵男「宗祇」青梧堂 P 313、横井金男「古今伝授の史的研究」臨川書店 P 280、関連して片桐洋一「中世古今集注釈書解題 3」上 赤尾照文堂 P 258
このほか新井栄蔵氏の古今伝授に関する一連の研究がある。
- 6 横井「古今伝授の史的研究」P 288・509、伊井春樹「源氏物語注釈史の研究」桜楓社 P 188
- 7 伊井「源氏物語注釈史の研究」P 365、木藤才蔵「連歌史論考」下 明治書院 P 531
- 8 拙稿「尚通公記に見る連歌師宗牧」堺女子短大紀要 18
- 9 「実隆公記」を扱った研究には芳賀幸四郎「公家社会の教養と世界観」(『芳賀幸四郎歴史論集 I 東山文化の研究』界文閣出版)がある。

討議要旨

棚町知弥氏より、中世末の公家や武将そしてその間を結ぶ連歌師のそれぞれの暮らしのたて方というような点から見て、たとえば源氏講釈などの場合近衛家の費用持ち出しであったのか否かとの質問があり、発表者より、連歌師を通じて大内氏よりの金品が近衛家に渡されている例や、近衛尚通が宗牧を北野連歌会の奉行役になるよう斡旋していること、また近衛家での講釈に際し武士達が物をもっていっていることなど三者の関連について発言があった。伊井春樹氏より、講釈の場で注釈などが生まれてくるのであろうとの、場の重要性にふれた上で、たとえば源氏講釈などは 2、3 年かかるようだが、聞いている者はテキストを持ってくるのかどうか、本文は読みあげるのか或は注釈だけをするのか等の具体的なことについての記事があるかどうか質問があり、発表者より日記の記事が簡潔であり、宗碩の源氏講釈の場合は、日記が丁度途中欠けているので詳しくはわからない。注釈は累積されて出来てゆくのだろうか、どこで行なわれたかがわかると日記の比較が出来るのであ

ろうとの発言があった。ジェームズ・アラキ氏より、公家や僧侶がどういうものに興味を持っていたかがわかり大変興味深いとの発言があり、福田座長及び発表者より、2、3それに関する参考文献が紹介された。